農具「ダチカキ」類の名称と形状

Notes on agricultural equipment “Dachikaki”- its names and forms

山田敏弘[1]

YAMADA Toshihiro[1]

［キーワード Keyword］　農具，除草，畝、ダチ/ラチ

［所　　属 Institution］　[1]岐阜大学教育学部（ Faculty of Education, Gifu University）

［要　　旨 Abstract］　本考察では、岐阜県及び愛知県に見られる「ダチ」あるいは「ラチ」を含む農具の名称と形状について考察する。「だめだ」という意味の岐阜県方言「ダチカン」、「ラチャカン」等に含まれる「ダチ/ラチ」は、「馬場の柵」を意味する「埒」を語源とする。この「ダチ/ラチ」と岐阜県及び愛知県で見られる「ダチカキ」などの農具の名称は、比喩の一種である換喩によって意味の変容が生じたものである。また、「ダチ/ラチ」を含む農具も、除草方法により形状もさまざまで、「ダチキリ」や「ラチウチ」など名称もさまざまである。本考察では、「ダチカキ」類の農具について、その名称と形状について、文献調査と隣地調査をもとに記述するものである。

1. はじめに

今から10年ほど前、父の亡くなるわずか前、わが家に「ダチカキ」と呼ぶ農具があることを知った。鍬(くわ)や箕(み)ほどよく聞く名称でもなく、ふとした折に父に「ダチカキもってこい」と言われて分からなかったことでこの農具にダチカキという名称があることを知ったのである。

直径22cmほどの半月型に切り取られた刃の部分が柄に付いた道具（図１）で、もっぱら畑の草取りに使用していたため、よく調べもせず、「ダチ」は「埒(らち)」からで、「柵」の意味から「際」の意味へと変化したと考え、そこを「掻く」ことで除草するため「ダチカキ」と呼ぶものと解釈していた。

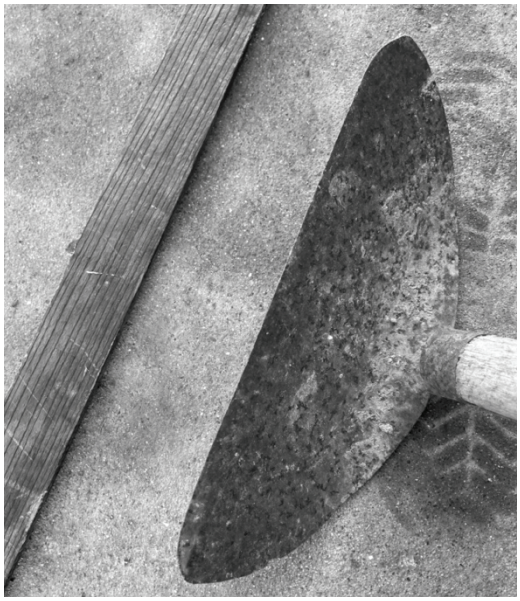

図１　岐阜市北部の「ダチカキ」（部分）

しかし、ふとしたきっかけで、同じ岐阜県内でも、半月型の刃ではなく、備中鍬のように４本の刃のある農具を「ダチカキ」と呼んでいることを、上石津(かみいしづ)郷土資料館にて知った。名称自体は、拙著『岐阜県方言辞典』に採録してあったが、各地の名称がはたして同じ農具を指しているのか疑問を持ち、「ダチカキ」の形状を調べ直すことにした。

一方、県外では、隣接する愛知県に同様の農具があることは確認済みであったが、さらに多様な「ダチ/ラチ」を含む名称を含む農具が確認でき、その形状にバリエーションがある可能性も出てきた。

そこで、岐阜県と愛知県を中心に、文献調査と臨地調査によって証言を集めつつ、この「ダチカキ」類農具の名称と形状を調べることにした。

2. 「ダチカキ」の記述

「ダチカキ」は、岐阜市北部のわが家の名称であり、岐阜県内ではさまざまな名称が用いられている。まずは、岐阜県内市町村史の記述を見ておく。

- だちかけ／万能『芥見(あくたみ)郷土誌』（1961：416）
- だちかけ／万能『鷺山(さぎやま)史誌』（1989：787）
- ダ(ラ)チァケ／埒明け（除草用具）『明宝(めいほう)村史』（1993：1091）
- ラチャケ／長柄の除草器『明宝村史』(1993：1102)

芥見も鷺山も、現在では岐阜市内に存在する校区名である。ここでは、「～ケ」で終わっているが、意味

的には「掻く」であろうから、連用形「カキ」の音訛であると推察する。一方、形状はというと、「万能」とは４本刃のある鍬の一種で、岐阜市北部のわが家では「備中」と呼んでいたものと推察する。つまり、岐阜市内でも形状の差が観察されるということである。

一方、明宝では、「ダ」と「ラ」、どちらの音で始まる語形も観察されている。これは、「埒が明かぬ」から「だめだ」という意味となったことばが、飛騨では「ダシカン」、美濃では多く「ラチャカン」となるように、県内でも揺れが観察されることと軌を一にする。語源意識からすれば、「ラ」であるが、弾音の「ラ」が有声閉鎖音の「ダ」と交替するのは、閉鎖の具合だけのわずかな素性の差と考えられ、ありうる交替である。一方で、「あける」は「掻く」とは異なる。「あける」の語源までは不詳であるが、「開ける」ではなくすきまを作る意味の「空ける」であろうか。

このほかに、昭和初期の『本巣郡志』には次のような記述も見られる。

・ だち、かん／句。だち、あかんにて、だちは埒の轉訛。埒明む（ママ）の意。埒は馬場の周圍の柵。らちやかん、だちかんともいふ。農具の一種にらちきりあり、だちきり、といふも同じ『本巣郡志』(1937：343　下線は筆者)

「ラチキリ」および「ダチキリ」と、語頭音の違いはともかく、こんどは「切る」ということばが見える。

岐阜県内では、このように断片的に方言の記述としても現れることばであるが、この農具自体があまり使われないのか、記述自体が少ない。かといって、ここまでに挙げた地域以外で使わないという保証もない。また、ことばの指す農具の形状も明確ではない。まずは、県内、どのような形状の農具がどのような名称で呼ばれているのか、調査しておかなければならない。

一方、県外ではどうであろうか。『日本方言大辞典』には、「ダチカキ」という語の記述は見られず、県外に「ダチカキ」、「ダチアケ」、「ダチキリ」の類の語は確認できないかに思われるが調査が必要である。

そもそも、この「ダチ/ラチ」とは何なのか。『日本国語大辞典　第二版』には、「1馬場の周囲に設けた柵　2物の周囲に設けた柵　3転じて、物事の区切り。適当な範囲」とあり、方言では、農業に直接関係する記述として「①苗株などの相互の間隔」の記述が見られた。かつて、拙著『岐阜県方言辞典』(2017：203)では、「ダチカキ」の名称の由来として「隣地との境をはっきりさせるという意味で『埒を掻く』との意からか」と記述したが、これは誤りである。「隣地との境」ではなく、どこの何を掻くかを含めて記述しなおさなければならない。そのために、この「ダチ/ラチ」についても、さらに調べていかなければならない。

また、農具ではなく、市町村史には、除草の意味で次の「ラチウチ」という記述が見られた。

・ らち打ち／カイ草をやった後、小型の備中で小らちをうって、草をすき込むことをらち打ちといった。『輪之内町史』（1981：706）

除草方法についても関連して調査が必要である。

以下、①岐阜県内外で「ダチ」あるいは「ラチ」の語を含む農具の調査結果を通じて、名称と形状の分布を示し、②「ダチ」あるいは「ラチ」の意味についての考察をおこなうという手順で論を進める。

3. 岐阜県美濃地方中西部の「ダチカキ」

今回の疑問のきっかけとなった上石津郷土資料館があるのは現在の大垣市であり、岐阜県西部(西濃)に位置する。まずは、西濃地区をはじめとした岐阜県内中西部の臨地調査をおこなった結果を報告する。

3. 1. 岐阜県揖斐郡揖斐川町

揖斐川町(旧地区)では、４本刃の備中鍬のような「ダチカキ」が一般的なようである。調査で訪れた際に揖斐川町歴史民俗資料館のそばで話を伺った町中心部に近い野中（のなか）の70代男性も、小島（おじま）の70代男性も、さらに、南に接する揖斐郡池田町の70代男性も、４本刃のあるタイプを「ダチカキ」と呼んでいる（あるいは、呼んだ）と証言している（揖斐川町歴史民俗資料館館長 小谷和彦氏による）。

一方、上ミ野（かみの）の80代男性は、半月型で柄の近くには空洞のあるタイプを「ダチカキ」と呼んでいると証言している。揖斐郡では、４本刃の備中鍬型が多く証言として出てくるが、半月型もないとは言えない結果となった。

3. 2. 岐阜県大垣市

大垣市歴史民俗資料館には、除草に関する展示の中に、「らち打ち」の語が見える展示がある。３本刃の備中鍬を用いて、田の膝まで育った稲間の草を取っている様子の絵も展示されている。

別の展示では、「江戸・明治～昭和40年代　青墓地

区」の「田の草とり」として、「らち打ち」、「かき打ち」、「ごま回し」などの名称が挙げられている。その下には対応して「一番草、二番草、三番草、ヒエ抜き」とあり、時期の違いが名称の違いとなっているものと考えられる。

「ラチウチ」に関する農具の展示はなく、３本刃の備中鍬が「かきうち」として展示されている（図２）。

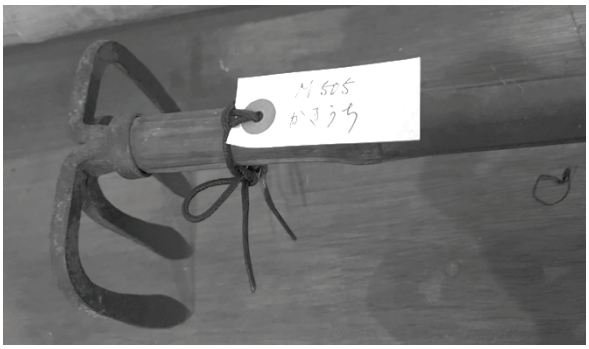

図２　大垣市歴史民俗資料館の「カキウチ」

「かき打ち」と「らち打ち」は、田の土を打って草を土に埋め込むことによる除草であり中耕も兼ねるため、半月型ではなく４本刃のある備中鍬が適しているのであろう。

なお、「かき打ち」の「カキ」は、竹中編(1985：59)に「株」の方言として当てられている。同書には、「畝打ち後、株んのこる、明治期は小刃先で一株毎打った」と振り仮名が振られている。「畝」が「ラチ」で「株」が「カキ」、いずれも場所を表している。そこの草を打ち込む道具という意味である。「株」を「カキ」と呼ぶ方言は他に確認できない貴重な記述である。

また、竹中編(1980：191,192)には、除草農具として「ラチキリ」「ラチカキ」も挙がる。後者は挿絵も添えられており半月型の刃が確認できる。

3. 3. 岐阜県大垣市上石津町

上石津町は、旧養老郡であり、平成の大合併の際に同じ養老郡の養老町が大垣市を含む広域合併に不参加となったため飛び地合併をした地域である。そのため、大垣市とは別に記述する必要がある。

上石津郷土資料館では、図３のような農具が展示されていた。当該農具は、平成一桁の頃、多良地区三ツ里（岩須）の方から寄贈されたものであるとのこと（上石津郷土資料館 辻下尚毅氏談）。鍬の一種だが、薄い金属がプレスされ強度が増すように湾曲しており、持ってみるとかなり軽量である。

なお、同地区では「手押しの田んぼの草取り機」を「ラチ」と呼ぶとの証言もある。これは、除草という機能が継承された新たな回転刃の農具に対して名称が受け継がれたものである可能性がある。

図３　上石津郷土資料館の「ラチカキ」

さらに、上石津でも山あいの滋賀県犬上郡多賀町へ抜ける道がある時地区の90代の方からは、「田んぼの草をとるヤツをラチカキ！と言うんやわ」（辻下尚毅氏からの教授）との証言も得られたが、同地区では、手押しのものは「ラチカキ」と呼ばないとのことである。

3.4. 岐阜県安八郡輪之内町

輪之内町歴史民俗資料館には、図３のような「らち打ち鍬」と「小らちかき」が展示されている。「打つ」と「掻く」の両方を名前に含んでいるが、「小らちかき」の方が、名前の通り、金具部分が小さく柄も短い。それほど力を入れなくとも草を掻くことが可能であると思われる。

図４　輪之内町歴史民俗資料館の「コラチカキ」及び「ラチウチグワ」

一方、同町教育委員会の増田浩志氏によると、同じ安八郡でも北部にある神戸町では半月型の道具であり、その名称は「ダチカキ」とのことである。安八郡でも、大垣市をはさんで北側に位置する神戸町と、南部の海津市に隣接する輪之内町では距離も遠く差があって当然である。西濃でも北部ほど半月型で「カキ」の名称が多いのは、土質のせいであろうか。

なお、神戸町では、畝のことを「ダチ」と呼んだとの証言も得られた。「ダチカキ」という農具は、「畝を掻く」道具そのものである。

まとめると、西濃の４地点の調査では、おおむね４本ないし３本の刃のあるタイプの農具を「ダチカキ」あるいは「ラチカキ」と呼んでいるが、北部には半月型もある。また「ラチキリ」の名称もある、となる。

3.5. 岐阜県郡上市明宝

村史にも記述のあった唯一の中濃地区自治体である現郡上市明宝では、歴史民俗資料館に「ダチャケ」の展示がある。今回は、同館の原義典氏から農具の寸法の入った図面と写真を送っていただいた。

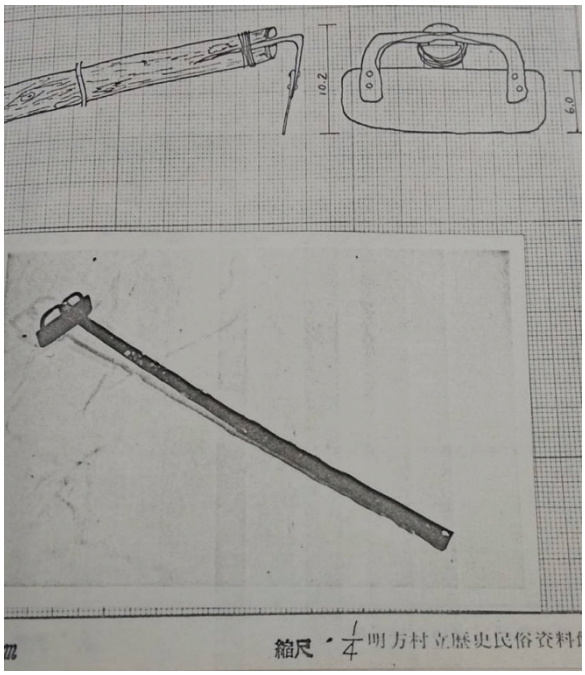

図５　明宝歴史民俗資料館の「ダチャケ」

形状が独特ではあるが、備中鍬型ではなく半月型に近い形状である。

3.6. 岐阜県内その他の市町村の情報

今回は本巣市立歴史民俗資料館、羽島市歴史民俗資料館、岐南町歴史民俗資料館でも聞き取り調査をおこなったが、これらの地域では当該農具は見られず、また証言も得られなかった。また、岐阜県教育委員会編(1968-1970)にも、大垣輪中と安八郡南部の安八輪中には「ラチ」の名を含む農具が確認されたが、岐阜市南部の加納輪中と羽島市の桑原輪中には確認できなかった。これらの地域で「ラチ」を含む名称の農具が存在しないとは言い切れないが、羽島市以東に「ラチ」を含む農具の記述が少ないことと符合する。

一方で、Facebookで情報を集めたところ、岐阜市南部で「ダチキリ」という情報が得られた。これは、半月型の刃の柄に近い部分に穴が空いており、図１に示したわが家のものの改良型であろうと推察される。

また、加茂郡白川町では、明宝歴史民俗資料館で確認された「ダチャケ」と同名の農具が確認された(図６)。

図６　加茂郡白川町の「ダチャケ」
（幅淑子さん提供）

半月型の刃が付いており、畝間の草を掻くのに使われるようである。この点は、わが家の物と同様である。

動詞部分については6.2節でまとめて考察する。

4. 愛知県木曽川沿いの「コラチカキ」

4. 1. 愛知県稲沢市

愛知県内については、市町村史及び農具関係資料を見る限りにおいて、木曽川沿い、すなわち美濃と接する尾張地方北部から西南部地域に「ラチ」の語を含む農具の記述が観察される。

稲沢市教育委員会(1966：7)には、４本刃の「大ラチ備中」と長方形の鉄部分の付いた「小ラチ備中」が写真で載る。

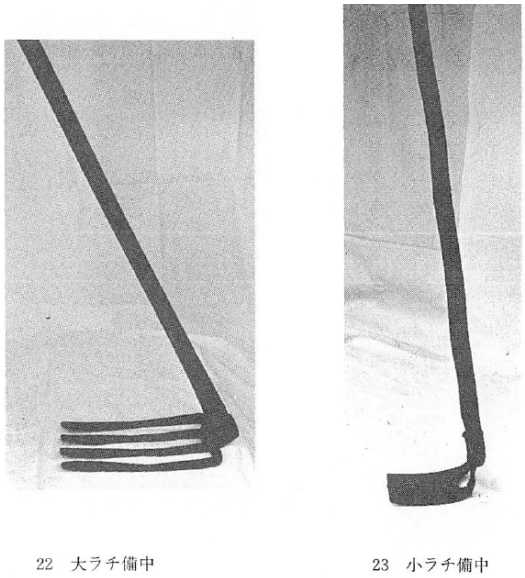

図７　『稲沢の民具』に見られる「ラチ備中」
（稲沢市教育委員会(1966：7)より引用）

同(1966：23) には、「大ラチ備中　稲の畦間を耕す備中」、「小ラチ備中　田植後稲の株間の除草に用いる小さい備中」とあり、用途の違いが明記される。実際、「大ラチ備中」は、田の土をひっくり返すなどして、草を土の中に隠して除草すると同時に土の空気を入れて成長を促進する、つまり中耕の用途があり、「小ラチ備中」とは用途の違いがあるものと考えられる。用途の違いが形状と名称の違いとなるのは当然である。

今は稲沢市になっている旧中島郡祖父江町の『祖父江の民具』(1989：31)にも、「中打ちびっちゅう」に、「大きい方の備中では、大らち（うねの間）の土、小さい方の備中では、小らち（株の間）の土をひっくり返しました」とある。こちらは、農具に名称の区別はなく、使用場所によって形状が異なっている例である。

なお、稲沢市に(歴史)民俗資料館はなく、実物の農具の展示はない。特に独特な形状であるだけに残念である。

4. 2. 弥富市旧十四山村

『十四山村史　民俗編』(1999：294)には、「コラチグワ」という、三本刃ないし四本刃備中の農具が写真とともに紹介されている。「（コラチグワは）畝の部分に稲の間の草や土（コラチ）を出す」との短い文から分かるのは、「稲間」ではなく、「稲間の土」を「コラチ」と呼んでいるということである。

また、同(1999：334)には、方言として「コラチ」の記述もあり、「水稲の株間」とある。これだけであれば、やはり、『日本国語大事典　第二版』の「だち」の記述として見られる「苗株などの相互の間隔」のうち、大小の区別をもって、「オーラチ」と「コラチ」が呼び分けられているものと考えられる。

問題は、場所としての「コラチ」が「土」の意味でも用いられていることである。『十四山村史　民俗編』(1999：334)には、「コラチダシ」という語も見られ、「水稲の株間の土をかく」こととある。用例も「コラチダシはよー面倒臭かったなー。」とある。これは、言語学的に言えば、換喩(メトニミー)である。換喩とは、隣接性・近接性による指示の拡張であり、場所を表す名称でその場所にある事物を指すのは、「霞が関」で「官庁」を表したり「瀬戸(物)」で「陶器」を表したりすることを考えれば、理解しやすい。

このことを確かめるために、2023年12月26日臨地調査をおこなった。弥富市歴史民俗資料館には、図８のような３本刃の鍬が所蔵されており、これが「コラチ」であるとのことを館長である伊藤隆彦氏より伺った。

図８　弥富市歴史民俗資料館所蔵の「コラチグワ」

さらに、氏によると、「コラチ」は、水稲の株間のことを第一に指すとのことであった。「土」のことは、そこから換喩により指すようになったと言ってよかろう。「オーラチ」は聞かれないとのことであったが、『木曽川下流低湿地地域民俗資料調査報告２』(1973：26)には「オーラチ」の語も見られる。それでも、「オーラチ」が「コラチ」ほど聞かれない理由は、この地域の湿田の特性によるようである。水の多いこの地域では、稲や裏作として作られる麦やジャガイモ、菜種などが、高畝（クネタ）を作って栽培された。特に稲の場合には、６条ほどの高畝を作って栽培され、この高畝のことを「ラチ」と呼んだとのことであった。

これも、各地でまっすぐ植える稲の列(条)と列との間を「ラチ」と呼んでいることと大差ない。「ラチ」に対して「小さい」方だけを「コラチ」と呼ぶことも、「動物」「惑星」に対して「小動物」「小惑星」だけがあり「大動物」「大惑星」が一般的名称として存在しないことなどありうることである。

4.3. 蟹江町

弥富市の東隣に位置する蟹江町歴史民俗資料館には、「ダチカキ」という半月型の金具の付いた農具の展示があった（図９左から２番目の↓のもの）。展示に「田起し用具」とあるように、除草のためとの限定はされていないが、名称及び刃に近い部分が波打ってい

図９　蟹江町歴史民俗資料館所蔵の「ダチカキ」

る形状からすると除草用道具であった可能性もある。

その他の形状のものについては、学芸員の花井昂大氏に調べてもらったところ、図９の農具について詳細は不明であるが、同館には三ツ刃鍬も収蔵されており、「鍬・こまざら・まんが」として登録されているとのことであった。

4. 4. あま市美和町

さらに、蟹江町の北に隣接するあま市美和歴史民俗資料館には、「オオラチマンガ」の名称の４本刃の鍬と「コラチマンガ」の名称の３本刃の鍬の展示があった。「マンガ」は、「馬鍬」の語源どおり、牛馬に引かせる大型のものが辞書的には多く記載されるが、当地では手持ちの鍬の一種で土を破砕する農具である。

図10に示したとおり、「オオラチマンガ」は、土を破砕するにふさわしい形状であるが、「コラチマンガ」は、先端が波打っており、むしろ土を寄せるか草を掻くのに適した形状である。

図10　あま市美和町歴史民俗資料館所蔵の「オーラチマンガ」（右）と「コラチマンガ」（左）

同館には、名称不明であるが図11のような農具も所蔵されていた。半月型の刃ではないにしても、一見して稲沢市の「小ラチ備中」に似ており、岐阜県内に見られる半月型の刃の農具にも近い形状である。草取りに使用された可能性もあるが、同館の近藤博氏によると、実際の使用法は記録もなく不明とのことである。

図11　あま市美和町歴史民俗資料館所蔵の除草道具（名称不明）

なお、あま市は、同じく海部郡の旧甚目寺町をも含んでいる。旧甚目寺町は旧美和町の東に位置し、名古屋市にも隣接するが、問い合わせてもらったところ「ラチ」の付く農具は確認できなかったとのことである。

4. 5. 愛知県内その他の市町村の情報

愛知県内について農具関係および市町村史を確認したところ、今回は、上記以外に「ラチ」の名を含む農具の記述を見つけられなかった。

ただ１点、インターネット情報であり詳細は確認できていないが、春日井市山王小学校ＨＰ「田の草取りのころ」に、回転除草機を「大らち」と呼んだとの記述もある（この点については5節でも述べる）。愛知県尾張北部地域については、より広範囲に引き続き調査を行う必要があるが、概要は示せたであろう。

5. 岐阜県・愛知県以外

岐阜県と愛知県以外で、今回、唯一「ラチ」の語が含まれる農具が確認できたのが、富山県砺波市である。

文化庁の「地域と協働した博物館創造活動支援事業」の一環として、51の事例が挙がる中に「No.24 砺波の民具の活用事業」（https://www.bunka.go.jp/chiikitokyodo/jirei/pdf/32-1-2.pdf＝2023.12.28確認）があり、その中に７月に「らち体験（除草）」という記述が見られる。また、「事業実績(32)」としても「砺波の民具活用事例」として「草取り（ラチ）」の様子が詳細に述べられている。

砺波市では、「草取り機」、「中耕除草機」のことを「ラチ」と呼び、「一番ラチ、二番ラチ、三番ラチと３回、苗の間に入れて交差するようにラチがけする。ラチの種類にも３種類ほどあり、使い分ける。草自体が化学肥料のない時代は肥料となったことに、子ども達は驚いていた」との記述があるように、除草自体も「ラチ」と呼ぶようである。さらに、この行為としては「ラチがけ」という用語も見られることから、農具と除草という行為両方に「ラチ」ということばが用いられているようである。

この点について、砺波郷土資料館の清水麻美氏によると、「『ラチ』という言葉は苗・または稲の列の間、株間のことを言います。その『ラチ』を鍬で耕す中耕除草のことを『ラチ打ち』、ラチ打ちをする農具（一般名称は中耕除草機）を『ラチ打ち機』『ラチ打ち機械』と呼びます。次第に省略されて中耕除草やその農具のことも『ラチ』と呼ぶようになりました。」とのことである。

除草を「ラチ」と呼ぶのは、佐伯安一(1961：56)にも記述されている。「ラチウチ　田植後半月ほどしてから、苗の業間を板鍬で打つ作業。これを一番ラチといい更に十日ほどしてから横に打つのを二番ラチという」とあり、除草のことを「ラチウチ」のほか、「ラチ」とも呼んでいる。ただし、農具の記述はない。

砺波市では、現在、佐伯の記述する「板鍬」ではなく、回転刃のついた除草機に対して「らち打ち機」という名称を用いているとのことである（清水氏）。岐阜県や愛知県内で調査した際にも回転刃付き除草機はあったが、これに対しては「ラチ」という名称を用いていたのは上石津の一部のみであった。岐阜や愛知では、「ラチ」ということばが「畝間」の意味を第一に残していたのに対し、富山では「除草」を「ラチ」と呼ぶことが定着していたとの違いが考えられる。

なお、「ラチ」という語を含む農具は、岐阜県から愛知県、また富山県の一部以外に、今のところ確認できていない。

6. 名称の考察

6.1. 「ダチ/ラチ」の意味の変化

今回は、「ダチカキ」という名の農具がわが家にあり、そこから農具の名称をまず調べていったが、当然、ここで「ダチ/ラチ」の語源と意味の変化を考えなければならない。

この「ダチ/ラチ」は、『日本国語大辞典　第二版』にもあるように「埒」なのであろう。『改訂綜合日本民俗語彙』第4巻 p.1720には、「ラチウエ」の項が見られ、「ラチは田植の時の苗と苗との間隔。（中略）ラチという語の行われる區域は広く、また栃木縣芳賀郡・愛知縣西春日井郡などには、大ラチ・小ラチの名稱もあり、飛驒でダチアイというのも同じ語の訛である。」との記述がなされている。

しかし、「馬場の周囲に設けた柵（『日本国語大辞典』）から、どのようにしたら、「畝間」や「苗間」の意味、さらに「土」や「草取り」まで、さまざまな意味へと広がっていったのであろうか。

今回の調査で、「畝間」ではなく「畝」自体を「ラチ」と呼ぶところがいくつか確認できた。輪之内町歴史民俗資料館で伺った、安八郡神戸町でも「畝」を「ラチ」と呼んだとの証言や、竹中誠一編(1985:：53)にも「畝」の振り仮名として「らち」と振られていることからも、「馬場の柵」を表す「ラチ」は、まず、形状として近似性を有する「畝」の意味へと転用されたと考える。ふつうの田んぼで畝は考えにくいかもしれないが、1反（たん）（10 a（アール））の10分の1は1畝（せ）であるし、輪中では高畝で裏作などをしたことを考えれば合点もいく。ただし、この意味は、現在、一般的な意味でない。

その「畝」の意味は、隣接する「畝間」へと換喩（メトニミー）によって変化する。隣接する事物によってある事物を表現する方法である換喩法は、与謝蕪村の俳句に見られる「蓑と傘」で「雨の中を寄り添い歩く二人の人物」を表すなど、よく知られた比喩の一種であるが、日常でも「風呂を沸かす（実際には風呂の水を沸かす）」のように頻用される。

このようにして成立した「畝間」との意味は、より広範囲に観察される。岐阜県内でも東に位置する土岐市を中心とした方言を集めた柴田八郎(1982：183）にも、「らち　稲田の稲と稲との間の植えてない直線部分」と記述がある。岩島周一(1996：211)でも、飛驒の方言として、「ダチ」を「植えた苗の株間。間隔。『－を広うしると育ちがええ』」と記述しており、飛驒には他にも「間隔」（『朝日村誌』1956：474)、「植栽物の間かく」（『山之口村史』1962：497）などの記述もある。ただし、いずれも道具の記述はない。分布から見て、より古い意味と言ってよいであろう。

なお、語源としては、岩島(1996：211)に、「へだちの略」とあるが、飛驒に近い郡上市明宝でも「ラ」の音を語頭音にもっていることから俄に首肯しがたい。

さて、苗と苗の間の間隔も一様ではない。植える進行方向に延びる畝間は比較的広く、株間は狭い。それらを呼び分けたのが「オーラチ」と「コラチ」である。『祖父江の民具』(1989：31)では、道具の名前は「中打ち備中(鍬)」であるが、畝の間を「大らち」、株の間を「小らち」と呼んだと記述がある。『西春町史　民俗編１』(1984：82)にも、「中打ちはオオラチ（オオラチ打ち）ともいい、オオラチに生える雑草を、土もろともかき上げて取り去ること」で、それから「七日ほどあとにコラチをかく。コラチはオオラチに比べて苗の株間が狭く、（中略）コラチ打ちは中打ち備中だけで行う」とある。「オオラチ」と「コラチ」では、間隔も違えば、また草取りの時期もずれる。ここから、場所も道具も区別の必要性が出てくる。

さらに、「株間」から、『十四山村史』に見られるような「株間の土」の意味をもつ「コラチ」が成立し、また、それぞれの場所を掻いたり打ったりする道具も「～ラチカキ」た「～ラチウチ」と呼ばれるようになったと考えられる。日本語の語構成からして、目的語を前に置き、後ろに動作を表す動詞の連用形を添えるのは、「ペン立て」や「ちり取り」など、身近にいくら

でも見つけることができる一般的な造語法である。ただし、「湯飲み茶碗」から「湯飲み」となるように、後部要素として道具名がある方が古い形態である。その意味で稲沢以南の農具名は分析的であると言える。岐阜県教育委員会編(1969：108)にある「（桑原輪中では）大正期になって、大垣輪中の方よりラチウチを学んできて行なうようになった」という記述と合わせて考えると、このような除草法とそれに伴う名称類は大垣から東へ広がったと考えてよいだろう。

さらに、その場所に対する行為である「除草」自体を「ラチ」で表すのも換喩である。「風呂」という場所で「風呂が済んだらビール」のように「入浴」を表すように、典型的行為が場所の名詞で表されるのはありうることである。前述『西春町史　民俗編１』(1984：82）の記述のほか、『師勝町史　増補版』(1981：636)には、「ノウアガリから四、五日目に一バンウチをする。これは岩倉町（現在岩倉市）あたりのオオラチのこと」とある。この地域で呼び名に差があったにせよ、地域によっては「オオラチ」が除草を指したことも示す（『西春町史』及び『師勝町史』については、北名古屋市歴史民俗資料館　市橋芳則氏のご教授による）。

ただし、「風呂」が基本的には物（場所）を表すように、「ラチ」も基本的には場所であるとの意識は残るであろう。そうなれば、「除草」は、「～カキ」、「～ウチ」、「～キリ」など、動詞の連用形を後部要素として付加することで行為を表すことばになる方が安定する。なお、現在は南砺市となっている岐阜県に接する五箇山でも除草は「ラチウチ」と呼ばれており（真田ふみ1979：10）、石川県加賀市でも同様の名称がある（野田浩2007：307＝加藤和夫氏のご教授による）。

さらに進み、砺波の「ラチ」が農具の名称となるのは、これも換喩の一種であるとは言え、やや特殊な例であると言えよう。このように、「ラチ」は、本来の「馬場の周囲の柵」から、「畝」へと転用されることにより農業に関することばとなり、そこから、①稲の畝間あるいは株間、②株間の土、③除草（草取り）、④農具の名称へと変容していったと考えられる。

「ダチ/ラチ」の意味の変容を、今回調査した各地での農具の形状との比較をしつつまとめると以下のようになる（「●」は確認される、「－」は未確認の意味）。

	①	②	③	④	形状
飛騨	●	—	—	—	
土岐	●	—	—	—	
明宝	—	—	—	●ダチャケ/ラチャケ	半月
白川	—	—	—	●ダチャケ	半月
岐阜	—	—	—	●ダチカキ/ダチキリ	半月/備中
揖斐川	—	—	—	●ダチカキ	備中/半月
大垣	●	—	(●)ラチウチ	●ダチカキ/ダチキリ	備中/半月
安八	●	—	—	●ダチキリ/ラチウチ鍬	半月/不明
輪之内	—	—	—	●ラチウチグワ/コラチカキ	備中
海津	●	—	—	●ダチカキ/ダチキリ	半月
上石津	—	—	—	●ダチカキ	備中/回転刃
稲沢	●	—	—	●大ラチ備中/小ラチ備中	備中/長方形
立田	●	●	(●)	●ダチカケ	備中
美和	●	●	—	●オーラチマンガ/コラチマンガ	備中
祖父江	●	—	—	●コラチマンガ	備中
弥富	●	●	—	●コラチグワ	備中
十四山	●	●	—	●ダチカケ	備中
蟹江	●	—	—	●ダチカキ	半月
西春	●		●	—	
師勝	●	—	●	—	
三好	●	—	—	●ダチキリ	不明
五箇山	●	—	●	—	
砺波	●	—	●	●ラチ(ウチキ)	回転刃

なお、愛知県みよし市は、岐阜県と愛知県尾張西部以外で唯一、農具名に「ダチ」を含む確認できた地点である（「だちきり　作鍬(埒切り)」『三好町誌』(1962：599)）が、資料が古く、問い合わせたが記述の詳細は不明であった。

まとめると、①の「稲の畝間あるいは株間」の意味はもっとも広く、また広範囲に広がっていることから、より古い意味であることが確認できよう。一方、②の「株間の土」の意味は、旧海部郡のみで観察される特殊な意味変容である。稲沢市以南で畝間の「オーラチ」と株間の「コラチ」を呼び分けた上で「備中」「馬鍬」「鍬」などの道具名が付いているのは、基本的に「ラチ」が場所の意味に留まっている証拠である。

③の「除草」自体を「～ラチ」と呼ぶのは、今回調査した限りでは砺波市と北名古屋市周辺のみであった。

愛知県教育委員会編(1962：25)に、立田村(現 愛西市)の農業の水稲に関する一年間の作業として、「田植え」、「稲刈り」、「中ウチ」とならんで「コラチ」とあることから、立田村(現 愛西市)で作業としての除草を「コラチ」と呼ぶ可能性があるが未確認である。

④の農具を「～ラチ」と呼ぶ地点は少ないが、上記の砺波市の例のほか、春日井市立山王小学校ＨＰ「田の草取りのころ」にも、「稲株の条間」である「おおラチ」の除草に用いる回転除草機も「大らち」とあるなど、新しい変化の方向性としてはあり得る。

6.2. 除草の方法と「ラチ～(動詞連用形)」

上記のとおり、稲沢市と旧海部郡以外では、「ダチ/ラチ」に動詞の連用形が付いた形となっている。おおよそ北から、「アケ」、「カキ」、「ウチ」、「キリ」となっており、「アケ」以外は、「掻く」、「打つ」、「切る」と推測される。この違いは除草方法の違いによるのであろうか。

まず、「打つ」について述べる。3.2でも述べたが、除草には段階がある。『みよしの民俗』(2011：97-98)によると、田植え後、二週間から三週間で「田に一面に水ナギが生え、10センチくらいは根が出ていた。」とあり、すぐに草取りが必要になった。その一番草を除去する方法は、片手でこの草を「なぜ起こし」、同時に片手でマンガという「15センチくらいの4本の刃がついた」道具で「土を付いてひっくり返し」て草を埋める方法である。さらに、日にちをおかず二番草となる。この二番草（取り）も、「草を田の中に押さえ込み、足で踏み込」むもので、一番草（取り）同様、草を抜いてしまうのではなく肥料として土に埋め込むことであった。

このような中耕を兼ねた「除草」の方法は、木曽川に近い稲沢市祖父江町でも行われており、『祖父江の民具』(1989：31)には、「中打ちびっちゅう」という道具を用いて、「田の土をひっくり返して、草を土の中にかくすとともに、空気を土の中に入れるのに使」ったとある。草を掻き出すのではなく草を田に打ち込むのが、このあたりで「ラチウチ」と呼ぶ所以である。

西濃でも同様に、「三ン鍬で一株、またぎ一鍬々々水中土を返す、（中略）稲切らさぬんよ、打ち込まんよ、（中略）隅から隅い、こべんと打ちこむ一番草である。」（竹中編1985：53）とする。同書には、畝を「ラチ」と呼ぶとあるように、草を田に打ち込む行為がまさに「ラチ打ち」である。

一方、「掻く」はどうか。「草を掻く」と言えば「掻き出す」方法が考えられる。多くは「～カキ」が小ラチ(鍬)を使っておこなわれており、半月型の「ダチカキ/ラチカキ」は、まさに表面の草を削って掻き出すにはぴったりの形状である。これは、わが家での用法に合致する。一方の上石津の備中鍬に似た４つ刃の鍬は、田に水を張った段階で生えている草を掻き出すのに効率がよい。どういった田の状態で草を掻くのかが形状の違いに現れているものと考えられる。

さらに「ダチキリ」は、畝間・株間に生える雑草の根を切ることが想像される。実際、「ダチキリ」と言う場所は「ダチカキ」を併用する場所も多く、また半月型の除草具を用いる所も多い。「掻く」や「切る」という除草法は、「打つ」とは異なるもので、道具の形状も異なることが推測されるが、実際にの名称としては、それほど明確な違いとなって現れてはいない。この点はさらに調査する必要がある。

6.3. 語頭音の違い

岐阜県で「だめだ」という場合に多く用いられる「ダチカン」類との関連で「ダチ」の語を含むこの農具に関心を持ったことが、この考察のきっかけであった。

音声学的に言えば、「ダ」と「ラ」は調音位置が同じで調音方法が前者は有声破裂音、後者は(有声)弾音であり、少し素性の異なるだけの近似した音である。

しかし、「ダチカン」類は、比較的美濃地方に語頭音が「ラ」となる形態が多く見られるとは言え、岐阜県内に明確な分布が描けない状況であり（紙幅の余裕がないため地図は載せないが、『岐阜県方言辞典』(2017：204)参照）、農具名の分布とも一致しない。

今回も「オーラチ・コラチ」と言い分けるところ、すなわち、「ラチ」という語が語中に保たれやすい傾向はありそうであるが、それ以上のことは明確に述べられない。

7. おわりに

身近な農具の中には、名も知れず消え去ろうとしているものもある。今回、「ダチ/ラチ」という語を含む農具を調べて、50代以上の記憶にはあってもそれ以下にはあまり馴染みがないこと、また、農業に携わってこなかった人には通じないことを痛感した。まさに、現代、消えつつある農具名である。

しかし、私たちは過去の日常という名もない歴史の上に生活をしている。農具の名称が過去の営農の苦労を伝え、また換喩という人間らしいことばの変化によってできたものであること、そしてその伝播のしかた

など、方言研究が、ことばだけでなく、農業など人間の営みと関連づけて研究する重要性、すなわち民俗学との連携の必要性を改めて教えてくれた。

金を生まない研究が軽んじられる昨今であるが、この農具の名称の研究は、この地に生きる人々の歴史の研究として重要であると信じる。

図12　岐阜県及び愛知県の言及した地域

【付記】

本研究は、科研基盤研究(C)「岐阜県方言に関する昭和音声資料の分析」(課題番号21K00546　研究代表者：山田敏弘）及び科研基盤研究(A)「『全国方言文法辞典』データベースの拡充による日本語時空間変異対照研究の多角的展開」（課題番号20H00015　研究代表者：日高水穂）の成果の一部である。

【謝辞】

今回の調査では、次の方をはじめ多くの方にお世話になった（おおよそ掲載順）

揖斐川町歴史民俗資料館館長 小谷和彦さん、大垣市歴史民俗資料館館長　長井克義さん、大垣市歴史民俗資料館友の会会長　高木信昭さん、上石津郷土資料館 辻下尚毅さん、輪之内町町教育委員会　増田浩志さん、明宝歴史民俗資料館　原義典さん、海津市歴史民俗資料館　水谷容子さん、稲沢市教育委員会生涯学習課大原さん、弥富市歴史民俗資料館館長　伊藤隆彦さん、蟹江町歴史民俗資料館学芸員　花井昂大さん、あま市美和町歴史民俗資料館　近藤博さん、北名古屋市歴史民俗資料館　市橋芳則さん、砺波郷土資料館　清水麻美さん、みよし市立歴史民俗資料館　塚本さん

Facebook「素敵な岐阜」メンバー　坂井田定雄さん、吉永美里さん、平井花画さん、奥村幸雄さん、松村頼子さん、Syuken Kawanamiさん、坂義行さん、松井佳男さん、臼井龍郎さん、幅淑子さん、市原昇さん

Mixi友人　高田善信さん

金沢大学名誉教授　加藤和夫先生

ただし、引用内容の責はすべて筆者にある。

【参考文献】

愛知県教育委員会編(1972, 1973)『木曽川下流低湿地地域民俗資料調査報告１』及び『同２』
芥見郷土誌編纂委員会編(1961)『芥見郷土誌』
稲沢市教育委員会編(1966)『稲沢の民具　［１集］　農業資料編』
岐阜県教育委員会編(1968, 69, 70)『岐阜県輪中地区民俗資料報告書』(1)(2)(3)
佐伯安一(1961)『砺波民俗語彙』高志人社
鷺山史誌編集委員会(1989)『鷺山史誌』
真田ふみ(1979)『越中五箇山方言語彙７』私家版
柴田八郎編(1982)『布るさとの言葉』
師勝町郷土史編集委員会編(1992)『師勝の民俗誌』
師勝町総務部企画課編(1981)『師勝町史　増補版』
十四山村史編集委員会編(1999)『十四山村史　民俗編』
祖父江町史編さん委員会編(1979)『祖父江町史』
祖父江の民具編集委員会編(1989)『祖父江の民具』
竹中誠一編(1980)『旧青野ヶ原方言考』大衆書房
竹中誠一編(1985)『百姓素描記』大衆書房
平和町誌編纂委員会編(1982)『平和町史』
西春町役場編(1984)『西春町史　民俗編１』
野田浩編著（2007）『石川県加賀市生活語彙辞典〈大聖寺地区編〉』私家版
三好町誌編纂委員会編(1962)『三好町誌』
三好町誌編集委員会民俗部会編(2011)『みよしの民俗』
明宝村教育委員会編(1993)『明宝村史　通史編下巻』
民俗学研究所編(1956)『綜合日本民俗語彙　第４巻』
本巣郡教育会編(1937)『本巣郡志』
山田敏弘(2017)『岐阜県方言辞典』岐阜大学
輪之内町(1981)『輪之内町史』
春日井市山王小学校HP「米作りのようす・田の草取りのころ」http://www.kasugai.ed.jp/sanno-e/昔の暮らし/komedukuri/kome2/kome2.htm（2024.1.5確認）

（令和６年１月９日受理）